

学校のあるべき姿は

帯広 通信制高生ら意見交換

【帯広】学校のあるべき姿について考えるイベント「学校って何だろう会議」が14日、帯広市のとかちプラザで開かれ、不登校や高校中退者を受け入れている通信制の星槎国際高校帯広キャンパスの生徒らが自身の経験を踏まえた「学校論」を語り合った。

同高1年の島津舞華さん是不登校だった小中学校時代を振り返り「(登校できよう)特別な教室を用意してもらったが、ほしいのは仲間だった」と人とのつ

ながりの必要性を強調。同2年の越坂効市さんは「学校は心から笑えることが少しでもある場所であってほしい」と話した。

また、同高卒業生の子供を持つ西川裕紀子さんは「学校は子供が社会で一人で生きていくための力を身に付けさせる場であるべきだ。今の学校は一時保育所のような役割しかないのではないか」と指摘した。星槎大の鬼頭秀一教授は「自分が必要だと思えば、知識は生きたものになる。学校

が自分の役割を再発見する場所になれば」と力を込めた。



(山本武史)

学校のあるべき姿について意見を交わした「学校って何だろう会議」